清代徽州における歙商の活動領域

松浦　章

一、緒　言

清代において全国を二分する大商人に山西商人[1]と徽州商人[2]がいたことはよく知られている。しかし徽州には六邑として歙縣、休寧縣、績溪、黟縣、祁門、婺源があった。地理的状況を簡単に述べれば、中央からやや東方に徽州府城がありその附郭に歙縣が、その西に休寧縣が、休寧縣の北西に黟縣、黟縣のやや南西に祁門縣、徽州府城から南西に婺源縣が、徽州府城から東北に績溪縣がある関係になる。そのため徽州商人と一括して考えられるが、各縣にはそれぞれ特色があったと思われる。ところが徽州の各邑出身の商人にはそれぞれどのような特色があったのかについてはこれまで充分に検討されず、看過されてきた。

そこで徽州各邑の商賈の特徴の一端として徽商の有力な輩出地である歙縣の場合を中心に検討してみたい。

明代徽州府の地誌である弘治『徽州府志』巻一、風俗に次のようにある。

讀書力田、間事商賈[3]。

とあり、一般的に徽州の人々は商賈となり商業活動に従事することがしばしば見られたようである。同書にこの部分の割注に次のように見られる。

舊志、六縣山壤限隔、俗或不同、歙附郭、其俗與休寧近、讀書力田、間事商賈。績溪之俗、有二、徽嶺以南、壤瘦而民貧、嶺北壤沃而民饒、黟則民撲而儉、不事商賈、祁門則土隘、俗尚勤儉、男耕女績、以供衣食、婺源乃文公、桑梓之鄉、素習詩禮、不尚浮費[4]。

徽州には六邑として歙縣、休寧縣、績溪、黟縣、祁門、婺源があった。中央からやや東方に徽州府城と附郭の歙縣、西に休寧縣が、休寧縣の北西に黟縣、黟縣の南西に祁門縣、徽州府城から南西に婺源縣が、東北に績溪縣があった。それぞれ地理的状況が異なるため、風俗も相違し、商賈を最も多く輩出したのは歙縣と休寧縣であり、両地の出身者が多くを占めていたことが知られる。すでに休寧縣出身の徽商の上海を拠点に木綿布を扱った汪寛也[5]について述べたが、血縁、地縁など宗族の結束の固い中国の商人の特性として、各商人の特性を明らかにするには、個個の商人の実態を究明する必要があろう。

そこで、本稿において徽州六邑の中でも清代における歙縣に限定し

て、商賈として商業活動を行った実態を追求する一方法として民国『歙縣志』に見られる伝記記述を中心に考察した。

二、明代徽商の商業活動

明代の嘉靖・萬暦時期の徽州商人の諸活動を知る史料として汪道昆の『太函集』があり、[6]そこに記された徽州人の伝記の中に、徽州商人の明代における商業活動を記した具体的史料が見られる。

『太函集』巻五六、「明故新安衛鎮撫黄季公配孺人汪氏合葬墓誌銘」によれば、

> 從兄賈婺、賈台、賈甄、賈括、賈姑孰、賈淮海、賈金陵。卜地利而地遷、相時宜而與時逐。善心計、操利權如持衡、居數十年、累鉅萬。[7]

とあり、黄彦修の從兄は商人となり、徽州の婺源縣や浙江沿海の台州府、温州府、中部の處州府、江蘇の蘇州府、常熟縣、兩淮そして南京と各地の地の利を求めて移動し、時局を鑑みて計画をたて、利権を得て、数十年の間に鉅萬の富を得たとされている。

『太函集』巻五一、「明故太學生潘次君暨配王氏合葬墓誌銘」によると、

> 處士（潘仕）賈昌江、居陶器、分道並出、南售浙江、北售鑾江、次君以三江相距各千里而遙、左右狼顧懼不相及、非策也。鑾江爲江淮都會、當舟車水陸之衝、其併浙江歸鑾江、於策便。既又以古之貨殖者必因天時、乘地利、務轉轂、與時逐。毋繫一遇。於是以鹽筴賈江淮、質劑賈建業、粟賈越、賈呉。[8]

とある。潘仕は、初めは江西の昌江に赴き陶器を扱った。すなわち景德鎮を拠点に瓷器の商いを行い、その瓷器を浙江や南京へ販売していた。その後、南京を拠点に浙江とも取引し、好機を得て、江淮において鹽を扱い、また南京では薬剤を、浙江、江蘇には米穀をとその商業取引を拡大している。

『太函集』巻五二、「明故明威將軍新安衛指揮僉事衡山程季公墓誌銘」によると、程灃は、

> 灃少孤、不能事六籍、（中略）歙歲入不足以當什一、其民什三本業、什七化居、吾其爲遠游乎。乃東出呉會、盡松江、遵海走維揚、北抵幽薊、則以萬貨之情可得而觀矣。吾其坐而策之、東呉饒木棉、則用布、維揚在天下中、則用鹽筴。[9]

とあるように、程灃は若くして孤児となり、商業活動で身を立てることを考え、蘇州、松江さらに揚州そして北京から河北に至った。程灃は、江南では木綿や木綿布を扱い、そして揚州においては全国に販路を有する鹽を扱っていた。

『太函集』巻四二、「明故處士前洲汪季公行狀」によると、汪琨は、

> 翁（汪琨）既服賈、察三子能修其業、則釋業授之、於是賈閩、賈呉、業駸駸起、以鹽筴賈淮海江漢、並起不貲。[10]

とあるように、汪琨は商賈となり、その子供等もその業を嗣いで、その活動域は福建、江蘇に及び、ついに鹽業を本業とするに至っている。

『太函集』巻四〇、「儒俠傳」に見る方景眞は、

> 景眞年踰舞象、出儒入商、（中略）北游臨清之滸市、（中略）景眞故在荆州、將以賈茶入蜀、資斧堇堇。[11]

とあるように、その活動域は広範囲に及び、北は山東の臨清、西南は四川まで及んでいた。

萬暦己酉（三七、一六〇九）『歙志』巻一〇、貨殖によれば、明代徽州歙縣商賈の活動領域に関する地域が記されている。

今之所謂都會者、則大之而爲兩京、江浙、閩廣諸省、次之而爲蘇松、淮揚諸府、臨清、濟寧諸州、儀眞、蕪湖諸縣、瓜州、景德諸鎭。[12]

萬暦三十七年（一六〇九）当時の歙縣のみならず徽州人にとっての都会とは北京や南京、江蘇の諸都市、浙江は杭州、福建この場合は福州、廣東は廣州などが大都会であり、揚州や山東の臨清、濟寧が、ついで長江と大運河が交叉する儀眞そして長江域の蕪湖さらに瓜州や瓷器生産の景德鎮などであった。そして歙縣の商賈達は、それらの地だけではなく辺鄙な地まで赴いていたようである。同書に、次のようにある。

故邑之賈、豈惟如上所稱大都會者皆有之。即山陬、海壖、孤村、僻壤、亦不無吾邑之人。但云大賈則必據都會耳。[13]

歙縣出身の商賈達は、北京、南京などの大都市のみならず山村、海辺、僻地の村落まで赴き、彼等の赴かない地は無いとまで言われたが、しかし大都市は大商人が根拠地としていた。

これら商賈の商業形態は、走販、団積、開張、質劑、回易[14]との五種の形態があった。走販は各地に赴いて商品を販売するいわゆる客商であり、団積は廉価で仕入れて高価で販売する商業行為、開張は店舗を開設して営業活動を行い、質劑は為替業務などの金融取引をおこなうこと、回易は交易、貿易行為を行うことであった。[15]これらの営業活動が、徽商の根幹とする商業活動であり、また同時に歙縣出身の商賈にも見られる特徴であったろう。

このような商業行為によって、徽州歙縣出身の商賈は全国展開を行っていたのであった。

三、清代徽州歙商の活動領域

ついで、清代における歙縣の商賈達の商業活動の実態を探る方法として、清代歙縣出身者の伝記史料から探ってみたい。

民国二六年（一九三七）『歙縣志』巻一、輿地志、風土に、

邑俗四郷不同、東接續溪、習尚儉樸、類能力田服賈、以裕其生。[16]

とあり、歙縣の四郷も風俗を異にし、一部は商賈となったようである。さらに、

農家事倍功半、故健者多遠出爲商賈焉。[17]

と、農業に従事していたのでは、生産性が高くなく、健康な人々は遠く異域に商賈となって活動の場を求めたのであった。そのことは衛哲治が「恵濟倉題疏」において、

竊照徽州府屬山多田少、所出米穀、即年歲豊稔亦僅、供數月民食、每每仰給鄰封江西、浙江等處販運接濟。[18]

と述べるように、徽州府は山が多く田地が少ないため、生産される米穀は、豊年の歳でも居住する人々の数ヶ月分の生産量でしかなかった。そこで近隣の江西や浙江に供給を仰いでいたのである。

そして民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土に次のようにある。

田少民稠、商賈居十之七、雖滇黔閩粤秦燕晉豫、貿遷無不至焉、

淮浙楚漢又其邇焉者矣。沿江區域、向有無徽不成鎮之諺、歙爲首邑則歙人之善賈、又其明證也。[19]

歙縣全域では田土が少なく人々が多く、商賈となるものは働き手となる年齢の主に男子の七割に及んでいたようである。そしてその赴くところは雲南、四川、福建、廣東、陝西、河北、山西、河南などが交易の地となり、両淮や浙江、湖南、湖北などは比較的近いと見られ、さらに長江流域の全域も徽州人が居ない所が無いとまで言われたとされる。

そこで、清代の歙縣の商賈達がどれほど、商業活動に関係していたかを民国『歙縣志』の人物志の孝友の記事から見てみたい。

洪清字克清、家貧、父遠賈病没。[20]

胡茂楠字賓石、湖田人、崇禎末、其父賈於閩粤、兵革塞途死。[21]

胡師謨字甫周、槐源人、其祖服賈江淮客死。[22]

方如珽字子正、環山人、祖慕塘、以賈歿潛山（安慶府）。[23]

程世鐸、褒嘉里人、六歳、父賈於外、音耗久絶、・・・[24]

汪元倫、大里人、兄元福、挾貲貿易、爲舟人所戕。元倫徧訪江湖三年、乃獲舟人・・・[25]

仰文炤、仰村人、其父大彬、賈於楚、値三藩兵事、轉徙流亡、絶無音耗・・・[26]

方紹堯字祁卿、巖鎮人、天性孝友、・・・愈父遺貲、悉讓與諸弟、隻身行商、修祖墓、建家祠、置義塚・・・[27]

王士汲、褒嘉坦人、康熙十七年、士汲年十九、侍父華順、往四川販木、中途遇盜、・・・[28]

程德煌字澍田、郡城人、性孝友、年十一、母卒、随父賈於揚、・・・[29]

潘兆臣字舜鄰、大阜人、錢塘商籍、康熙壬午歳貢、天性孝友、[30]

汪錫永、事母極孝、負販以供、・・・[31]

汪邦潮字次韓、性孝友、長兄早逝、撫其孤成立、同母弟四人、皆年幼、延師教讀、俱爲婚娶、與人賈、無私財以濟人、・・・[32]

畢致壽、邑城人、監生行販揚州、・・・[33]

曹榮字以年、航埠人、乾隆壬申歳貢、性孝友、兄泉賈揚州・・・[34]

汪廷瑋、富堨人、兄弟九人、瑋行四、二兄四弟早卒、瑋貿遷、以贍衣食、・・・[35]

周長松、溪磅頭人、商籍庠生、僑居杭州、・・・[36]

周淳德、溪磅頭人、父業賈、歿於山東、淳德尚幼、聞信號、泣不食、・・・[37]

江楗字輝宗、巖鎮人、早孤賈高郵、・・・[38]

胡澂字鑑、餘路口人、浙江商籍庠生、・・・[39]

胡士畿字衛京、上長林人、父廷仕、行賈湖南、久未歸、・・・[40]

洪錫善字楚良、桂林人、錫傑胞弟、賈於揚州、・・・[41]

黄嘉楙字向榮、潭渡人、唐孝子芮三十七世孫、父俊灝、賈於壽昌、病歸、・・・[42]

許大沐監生、幼孤家貧、服賈養母、嘗客蘇、聞母病篤、急欲奔回、・・・[43]

許兆元、許村人、侍父賈定遠、・・・[44]

畢照昇、父本晉、兄弟五人、惟本晉以服賈、稍有贏餘、恒資給其兄弟、・・・[45]

曹開業字樹標、航埠人、父世麟、叔世瓚皆以賈失意、歿於京師、[46]

方振鑑號菱塘、磻溪人、生五月、父客死、母呉教養、周至少長習商、往來呉越幽燕間、事母以孝、・・・[47]

許炳勲字静夫、號硯耘、許村人、父志堂、營商定遠之爐橋鎮、咸豊季年、遭亂逃歸・・・[48]

以上、民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友に見える清代の孝友記事から賈、服賈、商、商籍などの記述のある人物を抜粋した。各人の父親、祖父、兄弟、叔父などが商賈として活動していた記述ばかりであり、孝友の記述では、各自の家族に対する孝行に関して述べられているが、その家族が商業活動に従事していた事例が如何に多かったかがわかる。ここに掲げた二九例から、歙縣出身の徽商としての活動領域は、閩、粤、江淮、楚、四川、杭州、揚州、山東、高郵、湖南、壽昌（浙江省建德市）、蘇州、定遠（安徽省滁州市）、京師、呉越、幽燕間などその活動域は現在の沿海部の河北、山東、江蘇、浙江、福建、廣東省と長江流域の湖南、湖北、四川と主要な各省が見られ、ほぼ全国に及んでいたことがわかる。これらの地は、一人の歙縣徽商が活動したものではなく、歙商の全体を通じての足跡である。

歙商が最も得意とした地は、上記の記述のなかでも頻度が高いのは、安徽省徽州から比較的近い、江蘇の揚州や浙江の杭州は、歙縣徽商の最も得意とした地盤であったことは確かであろう。清代の旅程書の一種である『天下路程圖引』によれば、徽州から浙江省の嚴州府を経て杭州に至る「水路程」が見られる。徽州から水路を利用して安徽省と浙江省の省境に近い街口に至り、そこから浙江省に入り、淳安縣を経て嚴州[49]に至り、新安江、富陽江を水路で下降して杭州に至る路程である。「徽郡至杭州、水程六百走[50]」とある距離である。現在の公路の行程では、杭州、臨安、昌化から安徽黄山までが二八七km[51]であり、嚴州を経由する水路では二倍くらいになったろう。嘉慶年間であるが水路を利用した琉球使節が四六〇kmほどの行程を七日間で移動した例[52]があるから、順調に行けば一〇日ほどで到着できたであろう。

徽州から揚州へは、『天下路程圖引』に見る「南京由蕪湖至徽州陸路[53]」と「南京由漕河至北京水路程[54]」を利用すると、徽州府から寧國府の旌德縣と南陵縣を経て、太平府の蕪湖縣に至り、太平府城を経由して南京に至る。ついで南京から儀眞縣を経由して揚州府に至ることが出来た。南京から揚州は一〇〇km、南京から蕪湖は一〇〇km[55]、蕪湖から歙縣までが二〇四km[56]であり、当時の歩行の一日のkmではおよそ三〇kmとの事例[57]があるから、徽州から揚州、杭州はおよそ一〇余日の行程であった。

上記の記述の一端からその商賈としての活動の業種に関する記述は極めて少ないが、それでも四川において木材業に関与していた事実が伺われる。

民国『歙縣志』巻八、人物志、義行にも、商業活動に関与した賈、服賈、商、商籍などの記述が見られ、それらの記述がある人物の記事を抜粋した。各人の父親、祖父、兄弟、叔父などが商業活動に関与した記述が頻発する。最初に明末清初の人である鄭俠如から始める。

鄭俠如、長齡橋人、祖景濂、遷揚州、以鹽筴起家、俠如中崇禎己卯、・・・[58]

程量入字上愼岑山人、孝友仁恕、業鹽起家[59]、

呉爾襄字贊公、豐南人、以養親、服賈豫章、往來臨川樂安間、時値滇閩變亂、・・・[60]

鄭士寰字名區、鄭村人、賈江右、適順治戊子金王二寇煽亂、米價如珠・・・(61)

汪以功字惟敏、從父賈汴、母卒號痛、目爲之眚、客姑蘇有友(62)、鮑蕃字公衍、巖鎭人、年十二、父挈之、從賈於呉、嘗遊錢塘、・・・(63)

汪良蛟字爾昇、北鄉獅山人、幼喪父、服賈青陽、生平多義行、・・・(64)

江承東字曉蒼、江村人、少服賈於漢陽、・・・(65)

胡文相字亮公、貿遷都京師、以義俠著、康熙甲午、有仇諒臣者、・・・(66)

鮑峻字清譽、新館人、家貧好義、後業浙鹺貲漸裕、・・・(67)

呉宗聖路口人、以義俠聞、客蕪湖、・・・又有呉宗德者、宗聖族弟、康熙十三年、閩兵陷徽、・・・將至景德鎭、慮瓷業、・・・(68)

汪燧字遂有、贍淇人、家貧竭力養親、所欲無不致、中年賈於浙、業稍振、・・・(69)

汪應庚字上章、瀆口人、業鹺於揚、遂籍江都、富而好禮、篤於宗親、・・・(70)

汪嘉樹字滋榮、古城關人、貢生、父登澤以厚德重於鄉閭、・・・兄弟年十六、服賈以養親、・・・(71)

何永昌字思敏、富堨人、賈於廣濟縣之武穴鎭、・・・(72)

江春字穎長、一字鶴亭、江村人、少攻制舉業、乾隆辛酉・・・經商揚州、練達明敏、悉鹽法司鹺政者、咸引重推、爲總商、才略雄駿、舉重若輕、四十餘年、規畫深遠、高宗六巡江南、・・・(73)

許習經字聖章、許村人、家貧、随父賈通州、・・・(74)

程德基字時履、槐塘人、賈於江西、貲僅中人、嘉慶三年、廣信饑、德基捐貲、・・・(75)

馮正琦字景韓、鴻飛人、少習舉子、業不遇、即就賈、・・・(76)

呉榮運字景華、北岸人、幼習儒、父元貫、嘗販茶之京師、・・・(77)

胡堦字象九、七賢人、賈於江蘇、・・・(78)

方佺字山企、靈山人、少孤性敏悟、嘗賈楚漢間、・・・(79)

汪仁晟字曙堂、霞峯人、生有至性、少孤貧、服賈淮安、洞悉鹺務利弊、・・・(80)

鮑廷璵字奐若、賈於湖北武穴鎭、誠信篤實、・・・先是、徽人之客於湖北者、歿不能歸、喪日久多暴露、嘉慶十六年、廷璵倡率同人、立歸櫬局、路費葬資、皆取給、・・・(81)

鮑志道字誠一、棠樾人、幼習儒業、以家貧、就鹽筴、獨行君子之風、矯革鹽商侈汰、・・・(82)

汪秉鍵、豐堨頭人、随父賈於泰州、因家焉質直、・・・(83)

王煒字廣仁、王村人、年十三而孤、・・・從兄弟多服賈於外(84)、巴源立字於禮、魚梁人、父廷鵬、賈於外、・・・(85)

鮑日昭字天彰、堨田人、嘉慶九年歲祲、・・・長官咨移浙省、告糴通商以濟民食、・・・(86)

鄭秀圃字俊咸、鄭村人、幼孤貧、從叔賈於江西、・・・(87)

鮑漱芳字席芬、志道子、幼随父揚州、理鹽筴・・・(88)

王一標字士名、王宅村人、勤謹尚義、少貧負販謀生、及長家業稍裕、・・・(89)

呉鉉璋字禮南、昌溪人、幼受業於杭世駿之門、・・・孫紹彬、浙江商籍、辛巳恩科舉人。[90]

葉日扶字景升、新州人、業鹺於浙、・・・[91]

葉日葵字貞如、新州人、業鹺於浙、・・・[92]

鮑初旭、棠樾人、訟復祖墓地、子士偉嘗賈甌粤間、・・・[93]

呉瑞鵬字雪狎、父以鹽筴起家、・・・[94]

呉永評字衡品、昌溪人、少服賈燕京、・・・[95]

黄晟字東曙、號曉峯、潭渡人、居揚州、兄弟四人、以鹽筴起家、・・・[96]

羅福履字綏來、呈坎人、遷巖鎮、乾隆末、治商業于如皋、・・・[97]

許仁字静夫、號耕餘、許村人、賈於蕪湖、嘉慶十九年、安徽旱飢、・・・[98]

汪國清字仲維、瞻淇人、幼貧窶、以商業起家、・・・[99]

呉景松字鶴年、弟景恒字渭耒、昌溪滄人、同客北京、以茶業起家、・・・[100]

羅亨桐字嶧南、呈坎人、貿易江山縣、創業同仁堂義塚、咸豊十年太平軍、據縣城、・・・[101]

姚維節字守餘、深渡人、樂善好施、咸同間歳大饑、維節適自北京貿易歸、・・・[102]

程德成字謹軒、馮塘人、居滬上、以經営地産業起家、累資千萬、・・・[103]

金高德字厚存、潛口人、商於杭州、・・・呉輔嗣字彩雯、下長林人、貿易南昌、・・・[104]

以上が民国『歙縣志』巻八、人物志、義行に見える商賈に関連する記述である。四七名に及ぶ。この四七件の記述から歙縣出身が商業活動に従事していた地名は、揚州、江右、豫章、汴、京師、蕪湖、浙江、廣濟、通州、江西、湖北、泰州、甌、粤、如皋が挙げられる。その商業活動を具体的に示す例は多くないが、そのなかでも鹽業が多々見られ、その他に茶商があるが、これらが、歙縣商賈の特徴を示しているであろう。

ついで民国『歙縣志』巻八、人物志、士林にも商籍に関する人物が見られる。

方必遵字道行、世業淮鹽、・・・[105]

程浚字葛人、岑山渡人、以商籍生貢・・・[106]

汪燮元字玉亭、大里人、商籍諸生讀書、・・・[107]

劉椿字廕庭、敬興人、商籍諸生、師事項任田、程易田、篤学行動、勤於著述、・・・[108]

程焜字可山、槐塘人、儀徴商籍諸生、受學於呉錫麟・李周南・・・[109]

この四名の家族が商賈として活動していたことは確かである。

以上のように清代においても歙縣出身者には多くの商業活動に従事する業務を行う人物を輩出した。その背景として、歙縣社会の伝統的特色があったろう。これに関して民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土において次のように記している。

邑中商業、以鹽典茶木爲最著、在昔鹽業尤興盛焉。兩淮八總商、邑人恒占其四、各姓代興、如江村之江、豐溪澄塘之呉、潭渡之黄、岑山之程、稠墅潛口之汪、傅溪之徐、鄭村之鄭、唐模之許、

雄村之曹、上豐之宋、棠越之鮑、藍田之葉、皆是也。彼時鹽業、集中淮揚、全國金融、幾可操縱、致富較易、故多以此起家、（中略）奢靡風習、創于鹽商、而操他業、以致富者羣慕效之。[110]

歙縣を本貫とする商賈は、その最も得意とする商業分野は鹽商であり、金融業にたずさわる典商であり、茶葉の販売に関与する茶商であり木材を扱う木商であった。その中でも兩淮の鹽商として全国的に名が知られていた。とりわけ兩淮鹽を商人として統括する總商は八人いたが、歙縣出身者がほぼ半数を占めるほどの実力を有していた。とくに江村の江氏の他に、各村出身の呉、黄、程、汪、徐、鄭、許、曹、宋、鮑、葉氏等はその總商を輩出する有力な家系であった。兩淮の鹽業が隆盛時には金融機関にも大きな実力を発揮しており、この関連分野で起業するものも多かった。そのため奢侈の風俗も鹽商が社会に多いに影響を与えたのであった。

歙縣商賈の足跡が北京にも残されている。それが道光十四年（一八三四）刊行の『重續歙縣會館録』である。同書の「重續歙縣會館録序」の第一番目の序を記した曹振鏞は、冒頭で次のように記している。

吾歙之建會館于京師、肇自前明、規模已備。厥后、多之賢士大夫相繼經畫、以至于今、非一朝夕之故矣。[111]

北京において明代から歙縣の会館が設けられていた。明代の隆慶三年（一五六九）の碑には京師で活動していた歙縣出身者は「以千萬計」[112]とまで称せられ、嘉靖辛酉年すなわち嘉靖四十年（一五六一）には会館の建設が始まったようである。[113]

同書、新集の「重修歙縣會館記録」に記された捐輸者の名簿に業種が明らかな「茶商」として七三名の名簿と捐金額が記されている。[114]また同書、「續録義莊后集」の「義莊堆墳種樹由」に見る「乾隆三十二年至三十四年捐輸」に商業業種が見られ、茶行、銀行、茶商、銀楼、茶舗があり、とりわけ茶商の一六三名の名が列記されている。[115]

清代中期の北京おいて活動していた歙縣商賈は茶商の人数が最も多かったのであろう。

道光十二年（一八三二）の蘇州の呉江盛澤鎮に設けられた徽寧會館の「徽寧會館捐銀總數并公產粮税碑」に見える徽州府下の各郡邑の捐輸金の嘉慶十三年（一八〇八）より道光十年（一八三〇）までの會館創設に関する捐輸金の金額が見られ、徽州の各邑の総額が、歙邑5,328,137文、休邑5,853,636文、婺邑71,396文、祁邑10,841文、黟邑319,331文、續邑712,144文、旌邑45,25,245文であり、その全額は17,463,300文とある。[116]歙縣が休寧縣についで多額の捐金を拠出し、休寧縣が三三・五％、歙縣が三〇・五％とこの両縣で六〇％を超えている。その意味でも歙縣の経済力は、徽州府の中でも休寧縣とほぼ並んで他を圧倒していたことがうかがわれるのである。

四、小　結

上述のように、徽州商人と総括的に呼称されてきたが、ここでは徽州府の歙縣に限定して、その地の出身者の特性を探ってきた。とくに民国『歙縣志』の伝記類に記された歙縣の商賈達に限定して、その商業活動の一端を列記し、どのような地方に、どのような商業分野で活動してきたかを探った。

伝記記録から見られることは、歙縣商賈の活動領域は、京師、江西、浙江、湖北、四川、山東、閩、粤、揚州、豫章、汴、蕪湖、廣濟、通州、泰州、甌、如皋、杭州、高郵、壽昌（浙江省建德市）、蘇州、定遠（安徽省滁州市）など枚挙に暇が無い。その活動域は現在の沿海部の河北、山東、江蘇、浙江、福建、廣東省と長江流域の湖南、湖北、四川と主要な各省と、ほぼ全国に及んでいたことがわかる。これらの地は、一人の歙商のみで活動したものではなく、歙商の全体を通じての足跡である。

歙商が最も得意とした地は、上記の記述のなかでも頻度が高いのは、安徽省徽州から比較的近い、江蘇の揚州や浙江の杭州であり、当時の人々の交通方法としての歩行によって、徽州から揚州や杭州へは約一〇日の行程であり、これら地の利を得た地は、歙商の最も得意とした地盤であったことは確かであろう。

注

（1）寺田隆信『山西商人の研究―明代における商人および商業資本―』東洋史研究會、一九七二年一一月、一―四一三頁。

（2）藤井宏「新安商人の研究」（一―四）、『東洋学報』第三六巻一―四号、一九五三年六月、九月、一二月、一九五四年三月、（一）一―四四、（二）三二―六〇、（三）六五―一一八、（四）一一五―一四四頁。
傅衣凌「明代徽州商人」、傅衣凌『明清時代商人及商業資本』人民出版社、一九五六年七月第一版、一九八〇年七月第二版、四九―八九頁。
臼井佐知子『徽州商人の研究』汲古書院、二〇〇五年二月、四〇―一五一頁。

（3）中國史學叢書、『明代方志選』①、臺灣學生書局、一九六五年五月、二一頁。

（4）中國史學叢書、『明代方志選』①、臺灣學生書局、一九六五年五月、二一頁。

（5）松浦章著（程菲菲譯、曾煥棋校）「徽商汪寛也與上海棉花」、『徽学』（安徽大学徽学中心）二〇〇〇年巻、二〇〇一年六月、一九九―二一一頁。

（6）藤井宏「新安商人の研究」『東洋学報』第三六巻第二号、一九五三年九月、三七―三八頁。

（7）汪道昆著、胡益民・余国慶点校『太函集』全四冊、黄山書社、二〇〇四年一二月、第二冊、一一八一頁。

（8）『太函集』第二冊、一〇八三―一〇八四頁。

（9）『太函集』第二冊、一一〇一頁。

（10）『太函集』第二冊、九〇三頁。

（11）『太函集』第二冊、八五六、八五八頁。

（12）萬曆『歙志』巻十、張濤、謝陞著『明萬曆・歙志』黄山書社、二〇一四年三月、四一三頁。

（13）張濤、謝陞著『明萬曆・歙志』黄山書社、二〇一四年三月、四一五頁。

（14）張濤、謝陞著『明萬曆・歙志』黄山書社、二〇一四年三月、四一五頁。

（15）張濤、謝陞著『明萬曆・歙志』黄山書社、二〇一四年三月、四一五頁の脚注を参照した。

（16）民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土、一a。以下aは表、bは裏を示す。

（17）民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土、一b。

（18）民国『歙縣志』巻一五、藝文志、奏疏、五a。

（19）民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土、二a。

（20）民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二四a。

（21）民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二四b。

(22) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二五b。
(23) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二五b。
(24) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二六b。
(25) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、二七b。
(26) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、三〇a。
(27) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、三七a。
(28) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、三七b。
(29) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五二b。
(30) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五二b。
(31) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五四b。
(32) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五七a。
(33) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五七b。
(34) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五八a。
(35) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五八b。
(36) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五八b。
(37) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五九a。
(38) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、五九b。
(39) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六一a。
(40) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六五b。
(41) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六七a。
(42) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六七a。
(43) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六八a。
(44) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、六八b。
(45) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、七二a。
(46) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、七二a。
(47) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、七二b。
(48) 民国『歙縣志』巻八、人物志、孝友、七四b—七五a。
(49) 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覧醒迷』山西人民出版社、一九九二年九月、三六〇—三六二頁。
(50) 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覧醒迷』、三六二頁。
(51) 『全国交通営運線路里程示意圖』第二版、人民交通出版社、一九八三年六月、一四三頁。
(52) 松浦章「清代琉球使節の福州・北京間における清官吏の伴走」、松浦章「清代中国琉球交渉史の研究」関西大学出版部、二〇一一年一〇月、七一（五二—七八）頁。
(53) 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覧醒迷』、三九四頁。
(54) 楊正泰校注『天下水陸路程・天下路程圖引・客商一覧醒迷』、三九四—三九五頁。
(55) 『全国交通営運線路里程示意圖』第二版、一三二頁。
(56) 『全国交通営運線路里程示意圖』第二版、一五五頁。
(57) 松浦章「清代琉球使節の福州・北京間における清官吏の伴走」、松浦章「清代中国琉球交渉史の研究」関西大学出版部、二〇一一年一〇月、七一、七五頁。
(58) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二一a。
(59) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二二b。
(60) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二三a。
(61) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二三ab。
(62) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二四a。
(63) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二五a。
(64) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、二五a。
(65) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三〇a。
(66) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三四b。
(67) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三五a。
(68) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三六a。
(69) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三七a。
(70) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、三九b。
(71) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、四二b。
(72) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、四三a。

(73) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、四五b。
(74) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、四九a。
(75) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五〇a。
(76) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五二b。
(77) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五三b。
(78) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五四a。
(79) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五五a。
(80) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五五b。
(81) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、五五b—五六a。
(82) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、六二b。
(83) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、六三a。
(84) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、六五a。
(85) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、六五b。
(86) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七〇a。
(87) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七〇b。
(88) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七〇b。
(89) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七二a。
(90) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七四b。
(91) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七五b。
(92) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七六b。
(93) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七七a。
(94) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七八b。
(95) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七九b。
(96) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、七九b。
(97) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八〇a。
(98) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八二a。
(99) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八五a。
(100) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八六a。
(101) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八六b。
(102) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八八a。
(103) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八八a。
(104) 民国『歙縣志』巻九、人物志、義行、八九a。
(105) 民国『歙縣志』巻一〇、人物志、士林、一一b。
(106) 民国『歙縣志』巻一〇、人物志、士林、一四a。
(107) 民国『歙縣志』巻一〇、人物志、士林、一五b。
(108) 民国『歙縣志』巻一〇、人物志、士林、一八b。
(109) 民国『歙縣志』巻一〇、人物志、士林、二三a。
(110) 民国『歙縣志』巻一、輿地志、風土、六ab。
(111) 李琳琦、梁仁志整理『徽商会館公所徵信録匯編』人民出版社、二〇一六年一二月、上冊（上下冊）、一三四頁。
(112) 李琳琦、梁仁志整理『徽商会館公所徵信録匯編』上冊一四一頁。
(113) 同書、一四一頁。
(114) 同書、一七三頁。
(115) 同書、一九六—一九九頁。
(116) 蘇州歴史博物館、江蘇師範学院歴史系、南京大学明清史研究室合編『明清蘇州工商業碑刻集』江蘇人民出版社、一九八一年二月、三五八頁。

（関西大学名誉教授）